安田女子大学紀要　48，199-208　2020.

小学校音楽授業における児童の自己効力感を実感させる授業実践に関する考察

― 第１報：教師の指導言に着目して ―

永田　雅彦[1)]，片山　悠希[2)]，記谷　康之[3)]，藤原　逸樹[1)]

Sense of Achievement among Students in Elementary School Music Class: (1) Focusing on Teachers' Advice

Masahiko NAGATA[1)], Yuki KATAYAMA[2)], Yasuyuki KITANI[3)] and Itsuki FUJIWARA[1)]

[1)]保育科，
安田女子短期大学
[2)]広島市立草津小学校
[3)]福山大学大学教育センター

要　　旨

According to the new government course guidelines, to develop elementary school students' ability to "enjoy" music, teachers are required to teach both knowledge and skills. This includes knowledge about motifs and structures of music and skills to express oneself musically. However, in reality, it is very difficult to offer classes that are enjoyable for students and that are not a mere self-satisfying set of instructions pertaining to knowledge and skills.

This study focuses on the impact of advice given by teachers to students in two sample music classes. The results show that the teachers' positive remarks raised students' enthusiasm, encouraging participation and helping students overcome difficulties. In addition to the teachers' encouragements, focusing on class objectives neither negatively impacted students' commitment to the classes nor understanding of the classes even when the content was challenging and not necessarily enjoyable.

キーワード：小学校音楽、音楽教育、音楽表現、授業改善

は　じ　め　に

平成29年告示小学校学習指導要領音楽編は、音楽に対する感性を働かせ、他者と協働しながら、音楽表現を生み出したり音楽を聴いてそのよさなどを見いだしたりすることができるよう、内容の改善が図られた。[1]「感性」が、よさや美しさに気づく感覚であれば、音楽を聴いて「あっ、いいな」と気づくアンテナを働かせることであろう。そして、「他者と協働しながら」とは、

教師や級友と音や音楽及び言葉によるコミュニケーションを図り、意思や感情などを伝え合う学びのプロセスを意味している。

教科の目標では、表現及び鑑賞の活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を育成することが示されている。[2]音楽的な見方・考え方を働かせて学習をすることによって、本稿で焦点化した「知識及び技能」の習得も実現していく。「知識及び技能」は、教師が教え込むものではなく、児童が、思いや意図をもって表現したり、音楽を味わって聴いたりするプロセスにおいて、理解して自ら掴んでいくものである。

本稿は、児童が学んでいること、学んだことを自覚できるようにしていくにはどのような教師の指導言が必要なのか明らかにしようとしたものである。

1. 研 究 の 目 的

平成29年の第９次小学校学習指導要領では、第６節音楽、第１目標において「表現及び鑑賞の活動を通して、音楽的な見方･考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質･能力を次のとおり育成することを目指す。(1) 曲想と音楽の構造などとの関わりについて理解するとともに、表したい音楽表現をするために必要な技能を身に付けるようにする。(2) 音楽表現を工夫することや、音楽を味わって聴くことができるようにする。(3) 音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育むとともに、音楽に親しむ態度を養い、豊かな情操を培う。」[3]と「知識及び技能」の習得、「思考力、判断力、表現力等」の育成、「学びに向かう力、人間性等」の涵養の３点に基づいて、平成20年に公示された旧要領に比べて学習目標が具体的に整理された。

竹内（2019）は、自身の経験から「小学校の教員は様々な活動や指導方法を工夫し、子どもに飽きさせない授業を行っている。しかし、子どもを楽しませることが目的となり、本来の芸術としての音楽を味わわせることをどれだけ出来ているか、ということについては疑問が残る。楽しい授業、わかりやすい授業を、子どもたちが音楽に親しむ態度を養うための入り口とし、さらに音楽の本質的なよさを味わったり経験したり出来る授業をしていくことが大切ではないか」[4]と課題を提起している。一方、山中（2019）は「表現活動の技能向上に関する学習は、単なる教師の「教え込み」になってしまうという危険を常にはらんできた。この課題を解決するためには、児童自身が、表出される音楽の質を深めていくにはどのようにすればよいのかという課題を自ら見つけながら、技能の習得や向上に対して必要性を感じる学習展開を図る必要がある」[5]としている。

本研究は、児童自身が教師を含めた他者とコミュニケートしながら音楽活動を行い、自己効力感を実感することができる授業とはどのようなものかについて考察する。実際の授業における教師と児童のやり取りを観察し、「楽しいだけに陥らない音楽科授業」で「児童自身が音楽の質を深める授業」となり、児童の発する「できた」を引き出すことができる授業実践の方策を見出すことが目的である。

2. 研究の対象と方法

１）対象

広島市立草津小学校 ４年５組（男子16名、女子13名、計29名）の通常の授業を対象とした。

２）方法

２回の授業実践を行う。第１回目の授業実践について授業担当者へは介入せず、通常通りの授業を観察した。第２回目は「理論と技能の習得に踏み込んで授業する」ことにコミットするよう授業担当者に促し、その授業を観察した。この２回の授業実践に関して以下の４点について調査し、その違いを検証する。

① 授業での児童と教師の行動を映像と音声で記録する
② 教師と児童の発言の言語プロトコルを明らかにする
③ 教師の発言や動きの意図をインタビューにより検証する
④ 児童の「授業の振り返り」を分析する

3.　授業実践の概要

本稿で検討する授業は下記の通りである。

１）第１回目の授業実践の概要

・実 践 校：広島市立草津小学校
・実 践 者：草津小学校 片山悠希 教諭（音楽専科）
・実践日時：2019年６月14日（金）５時間目
・題　　材：ひょうしとせんりつ「トルコ行進曲」「ラデッキー行進曲」他

２）授業の展開

・本時の目標：「拍の流れや速度、強弱などに合わせて、指揮をすることができる」
・学習指導案

学習活動	教師の働きかけ 予想される児童の姿（・）	教師の支援（○） 個への支援（※）	評価（☆） （評価方法）
1　常時活動	あいさつソング・リコーダー演奏		
	はくの流れにのって指揮をしてみよう		
2　本時のめあての確認をする。 3　拍の流れにのって足ぶみをする。 4　４分の２拍子の指揮を知る。 5　順番に前に出てきて指揮をしてみる。 6　最後にみんなで指揮をする。 7　本時のふりかえりをする。 8　次時の学習内容を確認する。	拍の流れにのって足ぶみをしてみましょう。 ・拍の流れにのって足ぶみできる ・どんどん速くなる ４分の２拍子の指揮をやってみよう。 ・両手でやると難しい ・簡単～！ 曲をよく聴いて、拍の流れにのって指揮しよう。 だれが拍の流れにのって、強弱や曲の感じの変化を表すことができるかな。 どのように指揮をすると分かりやすかったか、今日分かったことを書きましょう。友だちの指揮を見て、気づいたことでもいいです。 「エーデルワイス」は何拍子でしょうか。	○「拍の流れにのって」とはどういうことかを確認する。 ○「1,2,1,2,…」と拍を示す。 ○だれが拍の流れにのっているか、個人名を取り上げながら誉める。 ○片手でゆっくりやってみて、両手でできそうな人は両手でやってみるように伝える。 ※難しい児童とは一緒に近くで指揮をやってみる。 ○拍の流れにのりながら、強弱や曲の感じが指揮で表せている友だちを見つけるよう伝える。 ○上手に指揮をしている児童を取り上げながら、指揮をしている様子を見取る。 ○指揮者の役割で確認した３つのことを中心に今日分かったことを書くように促す。 ※ふりかえりを記入することが難しい児童には具体的に、今日の授業を一緒にふり返る。	【音楽表現の技能】 ☆拍の流れや速度、強弱などに合わせて指揮をすることができている。 （指揮をしている表情や体の動き）

３）第２回目の授業実践の概要

・実 践 校：広島市立草津小学校

・実 践 者：草津小学校 片山悠希 教諭（音楽専科）

・実践日時：2019年７月10日（金）５時間目

・題　　材：サミングにちょう戦しよう「もののけ姫」から

４）授業の展開

・本時の目標：「サミングやタンギングの技能を身に付け、伴奏や互いの音を聴き合いながら演奏できる」

・学習指導案

学習活動	教師の働きかけ 予想される児童の姿（・）	教師の支援（○） 個への支援（※）	評価（☆） （評価方法）
１　常時活動 歌・リコーダー	あいさつソングと今月の歌の歌唱。 「花笛」と「ブラックホール」を演奏しましょう。 「ハローサミング」の復習をしましょう。 ・きれいな音色でサミングできる ・サミングがまだ難しい	○ペアを作り、タンギングのチェックをするように促す。 ○サミングができているかを確認し、サミング奏法のポイントもおさえる。 ・他の指が動いてしまってないかな？親指コントロール ・息の量はちょうどいいかな？	☆タンギングができている。【技】 ☆サミングができている【技】
２　本時のめあての確認をする。	ふき方のこつをつかみ、「もののけ姫」をえんそうできるようになろう		
３　「もののけ姫」１パートを練習する。	１パートを思い出してみよう。 ・上手にできる ・リズムがあやしい ・タンギングができていない ・サミングが難しい	※演奏が難しい児童には、楽譜を指で指したり一緒に歌ったりしながら個別指導する。 ○少人数に分けて演奏することで、一人一人の技能をしっかりと見取る。	【音楽表現の技能】 ☆サミングやタンギングの技能を身に付け、伴奏や互いの音を聴きながら演奏している。 （リコーダーの演奏）
４　「もののけ姫」２パートを練習する。	２パートを練習してみよう。 ・上手にできる ・リズムが分からない	○個人練習の時間を設けることで、できない児童に対しての個別支援の時間をしっかりと取る。	
５　二つのパートに分かれて演奏する。	分かれて演奏してみよう。 ・サミングが上手い ・タンギングが上手にできている	○少人数に分けて演奏することで一人一人の技能をしっかりと見取る。	
６　本時のふりかえりをする。	本時のふりかえりをしましょう。 （アンケート）		

4.　授業実践の実際

まず、第１回目の授業実践について、片山は「指揮者の役割」を学習する機会としてはいない。この活動を通して、拍子について知り、音楽の流れを生み出す拍の「強」と「弱」を感じ取り、音楽を体で表現することを目的としている。なお、永田、記谷、藤原は授業計画と実践には介入せず、通常通りの授業を行うことを片山に依頼した。

第２回目の授業実践については、リコーダーの演奏技能の習得を課題としながらも、複雑なリズムの理解や２つのパートによる合奏の美しさの感得を目指している。副旋律の演奏については片山が範奏し、その後児童全員で演奏することでメロディーの把握を行い、合奏の際にも２つの旋律を聴き分けられるように段階を踏んでいる。記譜上の二点ホ音の演奏に必要なサミングの技能の習得については前時までに教材「ハローサミング」でも行っており、本時は「音楽的なハロ

ーサミングの演奏」の出来不出来を児童自身が評価することから始めている。

第１回目と第２回目を通して、片山は「児童が楽しく音楽授業に参加しながら学びを深める」ことを目指しており、教師による「教え込み」教育に陥らないよう配慮した。しかし、第２回目においては、児童に対して、教材の知的理解を促す働きかけとして、あえて理論と技能の習得に踏み込んで授業をするように永田は片山に依頼した。

第２回目の学習指導案の記載では、サミングの習得、同技能の理解、リズムの理解と把握等に教師による働きかけや支援の中心を据えているが、同時に、片山の「現実的に、児童が知的に理解し技能の習得ができたと実感する授業ができるか」という点についての懸念も表れている。

5.　指導言の分析と児童の評価

1-a）第１回目の授業実践での指導言

当該授業における片山の発話について、「児童の行動を肯定する指導言」「観察（気づき）を促す指導言」「自主性を引き出す指導言」「間違いを正す指導言」「単なる指示語」に分類した。その総計は422回であり、それぞれ総計の22%、17.8%、5%、7.6%、47.6%であった。発言例は次の通りである。

・児童の行動を肯定する指導言

「みんな拍の流れに合ってたね」

「曲をきく、なるほど、なるほど」

「よくなった、いいねみんな、こころのなかで1、2とか、まあこうやって手拍子しよった人がいたみたいね」

・観察（気づき）を促す指導言

「音よく聴いて、さっきの行進みたいに」

「おおお、強いときはどんなふうにするかわかる?」

「曲の、あの、感じ。やわらかい感じとか、迫力ある感じとか、いろんな感じがあるよね」

・自主性を引き出す指導言

「きれいなバージョンのうたえバンバンでね、たのむよ」

「2パートいくひとたのむよ」

・間違いを正す指導言

「1、2、1、2、って言えたら合うかもね」

「ちょっと、あ、速いね、さっきより」

「やりすぎて途中でずれよったけど」

1-b）第２回目の授業実践での指導言

第１回目の授業と同様に、「児童の行動を肯定する指導言」「観察（気づき）を促す指導言」「自主性を引き出す指導言」「間違いを正す指導言」「単なる指示語」に分けて集計した結果、その総計は363回であり、それぞれ総計の12.1%、27%、8.5%、2.8%、49.6%であった。発言例は次の通りである。

・児童の行動を肯定する指導言

「何か、○△どころかすごい上手に腕をあげとる。すごいね」

「音がきれいに出よる」

「OK、うまい」
・観察（気づき）を促す指導言
「隣の相方のAさんが、トゥー、トゥー、トゥーのタンギングがちゃんとできているか、ちょっと聴いてあげて、わかった?」
「ちょうどいいぐらいに息の量が出ているかなということ、息の量がちょうどいいかな」
・自主性を引き出す指導言
「全員できたら、パーフェクトじゃ」
「どういう感じになるんかね」
・間違いを正す指導言
「もうちょっと強くてもいいかな」
「ちょっと目があってない」

２）第１回目と第２回目の比較分析
２つの授業における経過時間別に見た指導言の種類と回数を図１、２に示す。

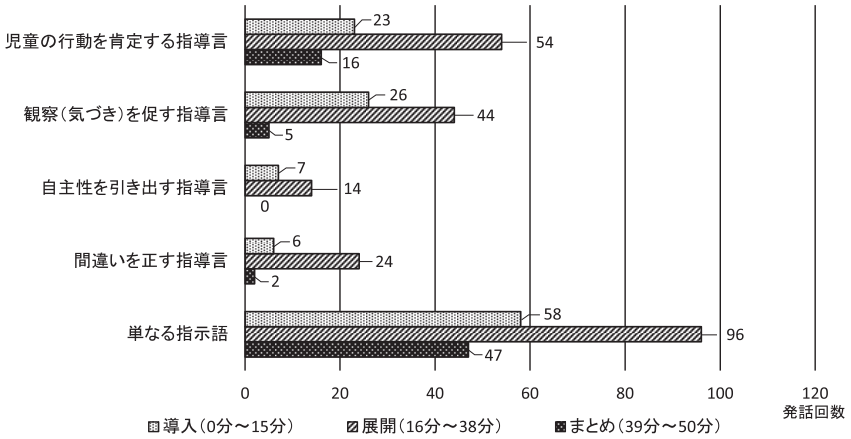

図１　第１回目授業の経過時間別にみる指導言

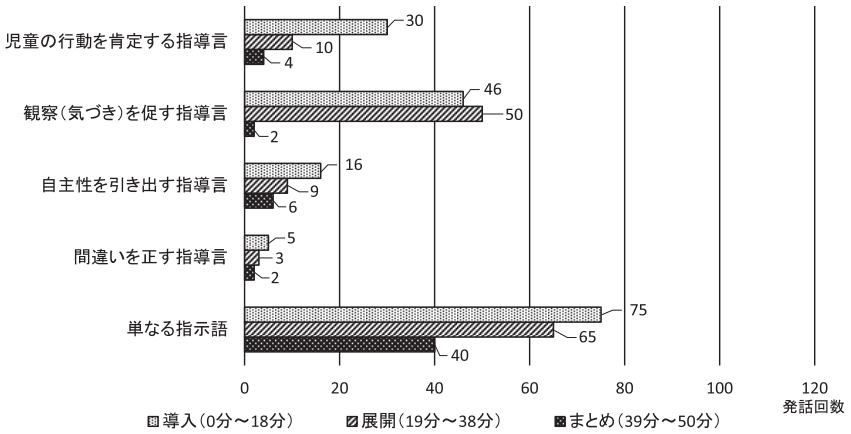

図２　第２回目授業の経過時間別にみる指導言

３）児童の評価

第１回目授業の振り返りでは、「拍の流れにのって指揮をすることができたか」の問いに対し、78.6%が「できた」と回答し、21.4%が「もう少しだった」であった。「どのように指揮をすると、みんなに伝わりやすかったですか？今日発見したことや、友だちの指揮を見て気づいたり感じたりしたことを書きましょう」との自由記述を求める問いに対しては、「ずっとはげしくやりすぎたので、きをつけたいです。やさしくすることを学んでいきたいです」「ぎゃくにはげしくやったらうまく見えなくて、なめらかに引くような感じでやればうまく見えると分かった」と適切に自己評価できていた。

第２回目授業の振り返りでは、各設問への回答の割合が、「「タンギング」がわかるようになった」と「「サミング」がわかるようになった」については、「よくあてはまる」を選択した回答が、それぞれ81.5%と77.8%であった。「「タンギング」ができる」と「「サミング」ができる」については、「よくあてはまる」を選択した回答が、それぞれ70.4%と66.7%であった。理解の程度をたずねた「「タンギング」をクラスの人に説明できる自信がある」と「「サミング」をクラスの人に説明できる自信がある」については、「よくあてはまる」と「あてはまる」をあわせた肯定的回答が、それぞれ74.1%と70.4%であった。「先生はわたし（ぼく）に、今日のじゅぎょうで自信のつくことばを一回以上言ってくれた」については、肯定的回答が33.3%であり、否定的回答が66.7%であった。分析結果は図３の通りである。

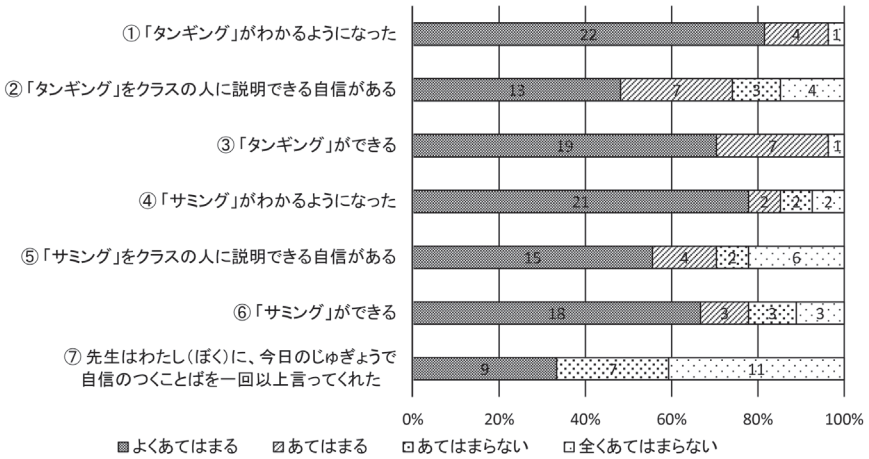

図３　第２回目授業の振り返りの分析結果

6.　実践授業に関する片山（教師）への質問と回答

２つの授業と音楽授業の実践について事後に次の３つの質問をし、下記の回答を得た。

①　片山先生は、どのような授業を目指していますか？（どのような音楽の授業にしたいですか？）

「自分のモットーは、全員が「わかる」「できる」授業です。

苦手と感じていたり、音楽に対して興味や意欲のない児童に対しても、「わかる」「できる」授業を提供したいと考えています。そのためには、まずは授業を進めていく上でのきまりやルールを提示し、なるべくポジティヴな言葉を使いながら授業するように心掛けています。「音楽って楽しいな」という土台の上に、「もっと上手になりたい」とか、「もっとこんなふうに演奏したい」というような理想が生まれてくるのではないかと思っています。「分かる」「できる」というのは、教師の教え込みだけでは成り立たないものだと考えています。」

② 第２回目の授業（７月10日）について、技能の習得に踏み込んだ授業を依頼されて、どう思いましたか？

「「技能」の習得は、一時間の授業で完結するものではなく、長期的に積み重ねていくものなので、一時間の授業でどれくらい踏み込めるかなと不安は大きいものでした。ですが、授業の前に永田先生と色々なお話をしていく中で、そんな切り込み方（音楽的視点）があるのかと、色々アイディアをいただけたので少し前向きに取り組むことができました。」

③ その（②の）結果どのように感じましたか。授業前、授業中、授業後についてそれぞれお答えください。

「授業前…不安

授業中…意外と反応してついてきている（上達しようとしている）

授業後…視点を絞って「技能」の習得を目指したことで、今日「何が」できるようになったのかが明確になり、授業への取り組み方も普段より積極的であった気がする。」

7. 考　　察

第１回目の授業は、指揮をするという活動を通して、強と弱で構成される拍子の性質を知り、流れや表情を表現するという内容であり、指揮の技術やアンサンブルをリードし音楽を作り上げる指揮技能の習得が目的ではない。本時においては、「児童の行動を肯定する指導言」と「観察（気づき）を促す指導言」の総数の多さと、授業の展開部におけるそれぞれの回数の増加がみられた。児童に知識や技能の習得を求める内容よりは「音楽を楽しむ」側面が表れやすい、所謂「のりやすい」授業内容であったこと、教師は児童の活動を応援し認める方向での発言が促進されたと考えられる。

一方、第２回目の授業では、第１回目と比較すると指導言の発現傾向に変わりはないが、総数が減少している。そして授業の導入部における発言の割合が展開部に比して多かった。本時の「リコーダーの技法の習得」と「器楽アンサンブル」を目的とした授業内容から、技能習得を目指す明確な目標設定が影響し発言に表れたと推測する。児童にとっては「できた」と「できない」を自覚しそれに向き合わなければならない、教師にとっては「楽しい」授業にできるかどうか、そして児童が「音楽嫌い」に陥らないように配慮しながら、一方では「技能の習得」を意識せざるを得ない、このような心理的状況が想定される。総発言数の減少は、「技能の習得」を目指したこと、導入部の発言数の多さは、学習目標の実現に向かうための「示唆」の多さとして表れたと推察した。

２つの授業実践を通して、導入から展開にかけて「児童の行動を肯定する指導言」「観察（気づき）を促す指導言」の占める割合が、「間違いを正す指導言」に比べて多い。「観察（気づき）を促す指導言」と「児童の行動を肯定する指導言」や「自主性を引き出す指導言」の多さは片山

の授業の特徴と言え、6-①の回答とも一致する。一方で児童は、第１回目には課題を発見しながら前向きに授業参加し、適切に自身と他者を観察・評価していたことが振り返りの記述に認められる。「知識や技能の習得」を目指した第２回目においても「わかる、できる」や「説明できる」を肯定的に評価する割合が多かった。6-③の回答についても肯定的な評価である。つまり、教師の働きかけと授業の目標の焦点化によって、「楽しい」ばかりではない、自分の実力に向き合う児童によっては動機づけの低下につながる可能性のある内容を盛り込んだ授業を実践しても、児童の学習への参加意欲と理解は低下しないことが示された。

ポジティヴな指導言は、児童を前向きにさせ、知識や技能の習得という局面でも有益に働くことを示しており、「児童が楽しく音楽授業に参加しながら学びを深める」と共に、教師による「教え込み」教育に陥らないための方途となろう。

児童の振り返りの中で「先生はわたし（ぼく）に、今日のじゅぎょうで自信のつくことばを一回以上言ってくれた」の項目は、ポジティヴな回答が33.3%であり、66.7%がネガティヴの評価であった。教師が授業の方略に従ってクラス全体をコントロールできていても、児童としては、個々人の活動を認めてポジティヴな支援と評価を欲していたことは心に留め置く点であろう。

6. ま　と　め

新学習指導要領において、音楽を「楽しむ」ことができる能力を育成することは、「思いにあった」表現をするための手段を身に付けることや、曲想と音楽の構造との関わりを理解することと合わせた「知識及び技能の習得」が必要であるとしている。現実の授業においては、「楽しい授業」を成立させ、加えて「知識と技能の教え込み」に陥らない実践をすることは容易でないことを先行研究でも指摘している。

本研究の授業実践では、教師のポジティヴな指導言による支援が、児童の前向きな授業参加と学習課題の克服について奏功していることを示した。山中（2018）によれば、「学習の中では、児童が自分の身体の様々な感覚と向き合いながら、自分のイメージを表現するためにはこの技法で良いのかというように、自ら振り返ることができるような指導を展開することが必要となる」[6]としており、本研究は指導の在り方に対し一つの有効な教育的手段を明示したといえる。

次報では、本考察を踏まえて新たに検討・計画した指導の具体策とその実践について報告したい。

引　用　文　献

１．文部科学省（2018）『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説音楽編』東洋館出版社 p.6.
２．文部科学省（2018）『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説音楽編』東洋館出版社 p.9.
３．文部科学省：小学校学習指導要領（平成29年3月31日公示）第6節音楽、第1目標
４．竹内由紀子「音楽教育における感動体験の必要性」千葉大学教育学部研究紀要 第67巻 pp.379 ～ 383 2019年
５．山中和佳子「音楽表現の質の深まりを目指した小学校音楽科の器楽学習」福岡教育大学紀要 第68号 第6分冊 pp.1 ～ 8 2019年
６．山中和佳子「リコーダーによる表現の工夫に焦点を当てた小学校音楽科の器楽指導」福岡教育大学紀要 第67号 第6分冊 pp.1 ～ 7 2018年

〔2019.　9.　26　受理〕

コントリビューター：青木　克仁　教授（生活デザイン学科）